認定特定非営利活動法人
RASA-Japan　ニュースレター
2025.12
Vol.49

垣間見た災害大国フィリピンの実態と深刻な環境問題への取組！

― Study Tour 2026の準備で現地を訪問しました ―

来年2月のStudy Tour開催まで3か月となり、その準備と実態調査のため、11月中旬にフィリピンに行ってきました。偶然台風上陸の時と重なり日本同様災害大国であることをあらためて知りました。RASA-Japan(以下RASAという)の新しい活動である環境改善をより具体化するため、特定地域の代表者やカブヤオ市の環境資源部長と面会しました。小学校での授業や食品配布につき校長や教育長と面会しRASAの取組をアピールしました。また、デンソーフィリピン様を訪問し工場や農場の見学とともに、当日の詳細計画を提示していただきました。最後にマニラ訪問の計画立案のため極貧のトンド地区を訪れ、当地にある教会の主任司祭からその実態を伺うことができました。

今回のフィリピン訪問は、私たちの飛行機と大型台風が同時にマニラへ向かうという緊迫した状況下で行われました。幸い、台風がゆっくり進み北へそれたことで、私たちは無事到着できましたが、RASAが支援しているサウスビルⅠ小学校近く(カブヤオ市内)では、ラグナ湖の水位が異常に高く、湖畔の住民は小学校の避難所で暮らしていました。彼らは、前回7月に訪問した当時からずっと湖の水位が高いので、4か月間もここに避難を続けているとのことでした。

防災テントで暮らす被災者世帯

浸水した家

さすがに、プライバシー保護のための小さなテントが各世帯に供与され、市や州から食料・医薬品などの支援物資は届いているものの、長期の避難生活は厳しそうと感じました。日本も避難者支援では後進国ですが、これだけ長期なら被災者住宅や一時金などの支援策が講じられるところです。

近年、フィリピンでは火山の噴火、地震、台風と災害が頻発し、特に経済的弱者の人たちは大変だろうと感じました。

地区長との面談で衣料品支援を約束

州政府から米5kgの支援

ゴミリサイクルを始めます

前回7月の訪問では、混然一体で投棄されるゴミの分別・再資源化への取り組みを、カブヤオ市長やサウスビルⅠ小学校長に提案し、賛同をいただきました。

今回の目的は、それらを現地で具体的にどう進めるか、その見通しを立てることでした。

リンビル地区でゴミ再資源化活動へ

そのチャンスは、思いがけず私たちの到着翌朝にやってきました。歓迎に集まってくれた今期ホストファミリーのひとりが、彼女の住むリンビル地区で、地域ぐるみのごみ分別・再資源化に取り組みたいというのです。

リンビル地区は約450世帯の中流以上の新興住宅地。そのコミュニティが、自主的にゴミのリサイクルに取り組んでいる地域です。私たちの話を聞いて、日本の優れたリサイクルシステムを取り入れて発展させよう、と考えたようです。

リンビル地区の街並み

この地区には、集会所や運動場、バスケットコートのほか空地もあって、生ゴミ堆肥を使いコミュニティガーデンにして野菜づくりもできます。

ちなみに、前回訪問時に生ゴミ堆肥づくりの試行をお願いした家庭では、4か月を経て良質な堆肥ができ上っていました。

生ゴミが良質な堆肥に

コミュニティガーデン

市役所の環境部長も協働を約束

私たちは、リンビル地区を最初の徹底したリサイクルモデル地区とするよう支援することを決定。翌日、カブヤオ市役所の環境資源部を訪問し、部長にこの計画を説明して財政支援と情報提供を求めました。

カブヤオ市環境資源部 部長（右）

部長は、快くこの計画を受け止め、今後も連絡を取り合い、協働ですすめることを約束してくれました。前回の訪問時も、市長から支援の約束を取り付けており、カブヤオ市リンビル地区でのコミュニティを核とした高度なリサイクルシステムは、実現に向けて大きく動き出したのです。

混然一体で収集されるゴミ

ゴミの埋め立て地
（焼却処分が認められていない）

小学校および教育委員会訪問

Study Tourの柱である小学校での授業の具体的な進め方を合意するため、サウスビルⅠ小学校にアロナ校長を尋ねました。併せて学校教育の上部組織にもそれをアピールするため、校長と一緒に教育委員会を訪問しクリストファー教育長やエドナ顧問と面会しました。教育長は日本への関心が高くRASAにも協力的で、食品配布支援によって築かれたパートナーシップを今後も継続し、ボランティアによる小学校での授業や環境への取組みに対して許可をいただきました。

クリストファー教育長（中央）とアロナ校長（右）

アロナ校長とエドナ教育省顧問（右）

企業訪問

7月に続きデンソーフィリピン様を訪問しStudy Tour本番を想定した会社説明と工場見学をさせて頂きました。環境保護とフィリピンの発展に尽力することを会社のビジョンに掲げ高効率な自動車部品工場とそれを支える従業員の能力を最大限に生かす経営面での工夫を工場の各所で見せてもらいました。

デンソーフィリピンの工場

水耕栽培のグリーンハウス

工場見学の後、車で1時間のイバーン農場に移動し、水耕栽培のグリーンハウスを見学。フィリピンの農業発展のため水耕栽培技術の開発と農業人材の育成をねらった取り組みで農業省の後押しを得て行っています。デンソーは自動車部品製造の技術を生かして水耕栽培のキーテクノロジーである養液供給システムを生産していて国からも有望視されているプロジェクトです。

ここで主力産品であるトマトや葉物野菜に加えて米の生産もしているという説明があり、RASAの食糧支援の米（年間約16トン）の生産と購入につき今後両者で検討を始めることとしました。

水耕栽培のデモ機を説明される鳥居社長（左）

世界の経済成長は全世界の地域に拡大しつつあります。手軽で便利で豊かで、多量のエネルギー消費の生活動向が「使い捨て文化」を生み、物質的な豊かさを享受してきたかもしれない間に、それが生活習慣化されてきて、今その弊害が地球上のあらゆる場所に具現化されています。生活を修正する時に来ていて、今まさに体験している温暖化による潮位上昇と気候変動です。多量のゴミ、温暖化による潮位上昇、水質、海洋汚染、大気汚染等々が私たちの住む地球環境に大きな影響を及ぼしていることを鑑み、経済第一から地球環境を守るための経済や政治の協力、また私たちの生活の仕方や生き方を考える必要があるのではないでしょうか。

スモーキ―マウンテン(首都マニラ・トンド地区)調査

事前調査のため、スモーキ―マウンテンに行ってきました。富が集中する首都のすべてのゴミがトンド地区の海浜浅瀬に長年に亘って投棄され一杯になり、廃棄場所をパヤタス(マニラから北東へ約1時間のケソン市)に移されました。ここはあらゆるゴミでできた山から煙やメタンガス、炎が出て「スモーキ―マウンテン」の名がつきました。仕事を求めて多くの島から来た人々が、仕事に就けず行き着いた場所です。ゴミの中から換金物を探し、それを売り生活していました。

道路両側にびっしり並ぶ住居(トンド地区)

この地は「国の恥」として地図に記載禁止で、何度も尋ねて辿り着き、教会の主任司祭から現況を聞きました。従来は教会で困難者に給食支給していましたが、寄付金が集まらず中止。今は子供たちに奨学金支給支援を実施とのこと。「貧困の連鎖を食い止めるには、教育を身に着けること。働かざるを得ない児童に奨学金を支給して学ぶことが貧困者救済への支援方法だ。」と心情を聞きました。

現況や支援方法を話す主任司祭(右)

裸足の子供たちが、年齢差を超えて仲良く無邪気に遊ぶ姿に感動しました。

集まってきた笑顔の子供たち

2019年時と比べ、道路にはバイクやトライシクルが沢山置かれ、食品を扱う露店もあり、経済状態が良くなっていました。

ゴミの集積販売場所になったトンド地区

しかし一方で、住まいを売却して、道路両側の多量のゴミの中で暮らしている人のなんと多いことか。この地にゴミが運ばれてこないのに、ゴミの中の換金物よって生活する姿を車中から見て、貧困の実態は以前から何も改善されてないことに、衝撃を受けました。

ゴミを選別する路上暮らしの幼児

2002年の訪問時に案内の神父様からお聞きした言葉が今も心に刻まれています。
「彼らは、自力で一生懸命生きているという誇りを持っている」

食品配布支援　活動報告

浸水被害を受けた食品配布支援対象世帯を訪問しました。下の写真の世帯は、水は引いたけれども床材が無いため、湿った土の上に段ボールを敷いて寝る生活をしており、ゴミの中から木材を集め、洗って売ることで生計を立てています。

訪問した支援対象世帯

ゴミの中から木材を探して売り生計を立てる

現地を回ってみて、「例年より雨台風の襲来が多く、こんな経験は初めてだ。」という声を多く耳にしました。その影響は度重なる学校閉鎖や低地浸水地区の避難移住、生活河川へ多量ゴミ処理活動など、生活者に大きな影響を与えていました。

また、食品支援世帯の訪問で最も影響を受けるのは最貧の人々で、直ぐに受けて困難な生活状態に陥っているのを知りました。

多くの児童を支援するため、7月に支援対象児童の入替を行い、140人中103人(約74%)が入れ替わりました。残り37人は困窮の程度が深刻なため、通年支援となりました。下表をご覧ください。

月収が15,000円未満の世帯が全体の76%を占めます。これは、スモーキーマウンテン(トンド地区)の大半世帯の月収とほぼ同じで、生活の最低限を維持することすら困難なほどの深刻な貧困です。
そして、家族人数は約60%が6人以上と多く、その中で10人以上の世帯が14世帯もあります。

RASAの1世帯あたりの支援食品代は1ヶ月で約2,413円と大きく、感謝とともに支援継続を強く願う声が届きます。

支援継続のために、温かいご支援をよろしくお願いいたします。

2025年7～12月　支援対象者情報

【2025年7～12月　支援対象者】

	幼稚園	小学1年	小学2年	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	合計	割合
新規	20	18	13	12	16	11	13	103	74%
継続	0	2	7	8	4	9	7	37	26%
合計	20	20	20	20	20	20	20	140	

【家族人数】

家族人数	世帯数	割合
2～5人	52	37%
6～9人	68	49%
10～14人	14	10%
不明	6	4%
合計	140	

【世帯の月収入】　1ペソ≒2.7円

世帯収入	世帯数	割合
0	22	16%
1～5,000円未満	3	2%
5,001～10,000円未満	31	22%
10,001～15,000円未満	51	36%
15,001～20,000円未満	25	18%
20,001～25,000円未満	8	6%
合計	140	

※1世帯あたり1ヶ月の支援食品代　約2,413円

食品配布支援がカブヤオ市教育省から表彰されました

11月25日にカブヤオ市教育省から、第8回優秀な教育関係者への表彰式で、RASAの食品支援に対して、2025年度第2位に選ばれ、賞状と盾を受領しました。

出張滞在中に撮影したRASAスタッフ3人のビデオメッセージが会場で流されました。教育長官から訪問時にも、長年実施しているこの支援の継続の依頼を受けました。支援対象世帯も多く被災されていた現状を見て、継続は必須だと強く感じました。

皆様のご理解、ご支援をこれからもどうぞよろしくお願いします。

賞状

盾

【StudyTour 2026】事前研修会を行いました

2026年2～3月に行われます【StudyTour2026】に14人の学生ボランティアが参加されます。

活動までに4回の事前研修会のを行い、活動内容の説明と現地活動の準備を行います。

11月1日(土)　南山大学キリスト教センターにて第1回事前研修会を、11/29(土)にカトリック平針教会にて第2回を行いました。

ボランティアの皆さんがこの活動を通して、大きく成長されることが楽しみです。

第1回事前研修会の様子

参加のしおり

今後の活動予定

12月18、19日	クリスマスチャリティーバザー参加　場所：南山大学 キリスト教センター
12月20月	第3回Study Tour事前研修会(場所：天白スポーツセンター)
2月　7日	第4回Study Tour事前研修会(場所：場所：カトリック平針教会)
2月15日～3月4日	Study Tour 2026

会員が減少傾向です！活動を支援いただける方、法人・団体を募集しています！

資料をお送りいたしますので、RASA-Japan事務局までご連絡ください。

※「遺贈によるご寄付」、「相続財産のご寄付」は、相続税が免除されます。お志のある方はご連絡ください。

RASA-Japanは皆様の会費と寄付金で運営されています

認定 特定非営利活動法人
RASA-Japan
理事長　藤井 忠子

〒468-0014　愛知県名古屋市天白区中平2-2627
TEL/FAX　052-803-1649
E-mail　info@rasa-Japan.com

郵 便 振 替 ：口座番号　00890-4-31185
受 取 人　特定非営利活動法人RASA-Japan
三菱UFJ銀行 ：平針支店　普通　0037025
トクテイヒエイリカツドウホウジンラサジャパン

クレジット決済はこちら
会員　寄付

ホームページ
http://rasa-japan.com

YouTube JP　@rasa_japan　@rasa.japan　@rasa_japan